

共感する 場を創る

WORK SHOP REPORT 2023

令和5年度

舞台芸術活用青少年支援事業 報告書

はじめに

文化芸術が人にもたらす影響と、神奈川青少年センターの機能を連動させた本事業は 5 年目を迎えました。

ホール運営課と青少年サポート課では、昨年度に引き続き、ひきこもり・不登校等、社会生活に困難を有する方に向けて、演劇的な手法の活用により「想い」を言葉で相手に届け、自身の意識変化を促すことを期待したプログラムを 3 回にわたり実施しました。1 回目を当事業に関心のある県内自治体職員と支援団体の方々に、2・3 回目は当事者とその方々の支援者を対象に行いました。これによりひきこもり支援者の方々の横の繋がりができ、さらに広域連携への発展の可能性が示唆されました。

指導者育成課では人間関係の構築の重要性を重点に、人々とのコミュニケーションの取り方を体系的に学ぶ取組みであるインプロを行いました。相手の意見を受入れ、そこに自分の意見をプラスする「YES,AND」プログラムでは、参加者により良い人間関係への構築を感じさせました。このインプロは、職場、学校などで必要かつ重要なコミュニケーショントレーニングとなることが期待されます。

多様性の尊重、共生社会の実現が望まれている現在、舞台芸術の表現方法を用いたワークショップを実施することで、コミュニケーション能力の向上を図り、併せて参加者が自尊感情や自己肯定感を育み、実社会での生活や就学・就業の課題へ取り組む姿勢を生むためのきっかけとなることを願っています。

この企画にご尽力いただきました、アーティスト、団体みなさま、参加者みなさまに感謝を申し上げますとともに、この報告書が様々な企画等を考える際に少しでもお役に立てば幸いです。

神奈川県国際文化観光局文化課
舞台芸術プロデューサー 兼
神奈川県立青少年センター
紅葉坂ホール・スタジオ HIKARI 支配人
楫屋 一之

目次

はじめに ————— p1

目次 ————— p2

派遣アーティストプロフィール ————— p3

REPORTS

Report1 舞台芸術活用ワークショップ ————— p4

Report2 インプロワークショップ ————— p11

派遣アーティストプロフィール



photo by manami tanaka

河井 朗 (かわい ほがら)

演出家・ルサンチカ主宰

大阪市出身。ルサンチカ (ressenchka) という舞台作品を作るカンパニーを主宰し、人を人たらしめているものは何かを問うために、戯曲を使ったり、人に話を聞いて構成した作品を上演する。

ここ数年は継続的に「理想の死に方」や「あの日について」等を人々にインタビューしている。東京、京都を主な場所として活動する。



峰松 佳代 (みねまつ かよ)

役者、インプロ講師、
株式会社インプロジャパン・シニアトレーナー

日本大学芸術学部演劇学科卒業。幼少より映像・舞台分野で活動。2004年よりインプロ・ジャパンに所属し、現在では、インプロパフォーマーとして活躍する傍ら、企業から学校まで幅広い分野にて、インプロを活用したトレーニングの講師も務めている。

Report 1

舞台芸術活用ワークショップ

1.概要

会場・日程

- 第1回 12月26日(火) 13:30~16:30
青少年センター 研修室1
- 第2回 1月19日(金) 13:30~16:30
アミューあつぎ ミュージックルーム1
- 第3回 2月6日(火) 13:30~16:30
海老名市総合福祉会館 第1、2 娯楽室

事業の背景及び趣旨

ひきこもり・不登校等、社会生活を円滑に営む上での困難を有する方を対象に、舞台芸術の表現方法を活用したワークショップを実施することで、コミュニケーション能力の向上を図る。

主催：神奈川県立青少年センター

共催：厚木市、大和市、海老名市、座間市、綾瀬市

参加人数

- 第1回 21名(対象：県内自治体職員)
- 第2回 15名
- 第3回 18名
- ※第2回、3回の対象者は別紙「チラシ」のとおり

担当者の開催意図

昨年度に引き続き、ひきこもりや不登校の当事者であり「生きづらさ」を感じている人たちが、舞台芸術の手法を通して自分の想いや経験を言葉で表現する体験をすることで、自身の意識に変化が起きることを期待して実施した。

また、今年度からの新たな試みとして、県央地域の複数の市と共催することで、ひきこもり支援における市域を超えた広域連携の強化を図った。

なお、全3回のうち第1回のみ、参加対象者を「当事業に関心のある県内自治体職員」とし、第2回、3回開催に向けて、各自治体が支援するひきこもり等の当事者への参加を促すため、まずは職員がワークショップを経験する機会とした。併せて、次年度以降のより広域的な事業展開も視野に入れ、今年度連携している自治体以外の職員に、本ワークショップの手法を広く知ってもらう機会とした。

派遣アーティスト

アーティスト

…河井 朗(演出家・ルサンチカ主宰)

アシスタント

…蒼乃 まを(俳優)

永井 茉莉奈(俳優)※第1、2回のみ

中條 玲(俳優)※第3回のみ

2.ワークショップ内容

ワークショップ企画のポイント

昨年度は、かながわbeフレンド(神奈川県が委嘱し、相談助言等を行うひきこもり経験者)に参加を促したのに対し、今年度はひきこもり等の当事者(今現在生きづらさを感じ、行政の支援等を受けている方)の参加とした。そのため、各回の開催前には派遣アーティストと共催市担当者を交えた打合せを行い、参加する当事者の特性等をふまえて配慮すべき点など、意見交換しながら準備を行った。

ワークショップの流れ

○導入

○ワークショップ開始

「あの日」を描く

「あの日」を想像して話す

グループワーク

発表

ワークショップの詳細

このワークショップは、参加者自身の思い浮かべる「あの日」について絵を描くことから始まる。「あの日」は参加者の過去の体験、印象に残っている物、記号、架空の出来事など、何でも良い。

その絵を会場内の好きな場所に貼り、展示会風に見学をした後、それぞれが印象に残った絵についてあたかも自分が描いた絵のように説明をする。

最後は、グループに分かれ、選ばれた1枚の絵を二次元(絵)から三次元に再現してみる「立ち上げ作業」を行った。

第1回では、それぞれのチームが異なる絵を選びワークを進めたが、当事者が参加する第2回、第3回では、同じ1枚の絵から、2グループに分かれて絵の再現についてワークを進めた。その結果、第2回では、ワークを進めていく中で、最終的にグループを合体し、1つの音楽ライブを参加者全員で再現して盛り上がった。第3回では、それぞれのグループが再現を行ったが、同じ絵を見ても、グループによって表現する内容ははっきり分かれる結果となった。集まるメンバーや雰囲気によって、その日限りで生み出されるワークショップの面白さが表れていた。

ワークショップの流れ



【導入】

自己紹介、ワークショップの説明など。参加者の自己紹介は講師からの「今年、一番美味しかったものは何ですか」「今年やり残したことは何ですか」といった質問に答える形で行われた。



【「あの日」を描く】

参加者それぞれが思い描く「あの日」で印象に残っていること・物・風景などを描く。色をたくさん使う参加者もいれば単色で描く人もいた。絵を描くことが苦手な参加者のために用意した「お助けアイテム」も絵の素材の一つとして大活躍



【「あの日」を想像して話す】

気になった絵を選び、絵から想像した「あの日」を自分が作者であるかのように話す。講師がその絵について質問をするが、参加者はさらに想像を膨らませて答えていく。

3.アーティストレポート

いつも自身が行うワークショップでは、簡単な自己紹介と演劇を使ったワークショップだが皆さんに演技をしてもらうつもりはないこと、そもそも演劇とはなんなのかということ、そんなような話で始めていく。

演劇というより「物語」はほとんどの場合、すれ違いから始まると考えている。登場人物たちの考え方や生き方がすれ違い、それを解決するために人々が触れ合っていくことになる。有名なものでいえば『ロミオとジュリエット』などが想像しやすいのではないだろうか。彼らはすれ違っていなければ2人とも幸せな結婚生活を歩めていたかもしれない。そして、私はそのすれ違いこそが「物語」の面白みだと考えている。自分の考えがわかってもらえない・伝わらないことは、まるでいけないことだとされてしまうことがある。けれど、自分のことだって完全に理解できないのに他人のことなんか理解できるはずがないのではないか。伝わらなくて、理解できなくて、誰かと一緒にいることはできるはず。相手を思いやるために相手のことを想像するというのをこのワークショップを通して体験してもらいたいと考えている。

今年度は『言いたいことって何だろう?』というタイトルをつけて頂いてワークショップ参加者を募集した。言いたいことの主語は、自分でも相手でも良い。正解のない空間でなるだけ楽しく考えを巡らせてもらえたらと考えていた。

実際のワークショップの内容は、昨年度実施したことを基本とした。参加者に「あの日」についての絵を書いてもらい、それを会場内に展示、みんなで鑑賞する。その中から1つだけ好きな絵を選び、その絵の作者になりきって絵の解説を行う（語る・^{カタ}騙る）という流れである。これは自身がインタビューを用い



【グループワーク】

2つのグループに分かれて、講師と一緒に絵から想像した物語を作る。



【発表】

絵から想像した物語をグループごとに全員で演じる。

た作品を製作する時に稽古で実際に使用するちょっとした遊びを転用したものだ。

演劇は信じてもらわないと始まらない。ここは海だと登場人物が言えば密室の乾いた劇場でも、たちまち海になる。この「嘘」を「信じる」ことを体感してもらいつつ、自分の書いた絵が全く違う語られ方をする「すれ違い」も同時に体験してもらうことが出来る。

計3回のワークショップのうち、1回目はまず支援者向けに行うことになった。そこでは、共催市の関係者をはじめ支援者の方々が多く参加してくださり、この日の感想会では支援者の方々がワークショップに求めているものを具体的に知ることが出来た。

昨年はかながわbeフレンドの方々が多く参加してくださったこともあり、「自身の経験を話すだけに留まらない機会の創出」を目指していた。しかし、今年是不登校・引きこもり当事者をメインの対象者としていたため、中には人前で話したり表現したりすることが難しい可能性のある方がいるとのことだった。

依頼を受けた以上、この企画がどのような立ち位置で、どういった影響があり、どんな成果が見込めるかなど、企画の展望を想定するところから始めていく。私たちは参加者の方に学びや達成感など何かしらの成果を持って帰ってもらわねばならないと意気込んでいた。

しかし、良くも悪くも支援者たちの求めていることは違っていた。それもそのはずで、1回たった3時間のワークショップで出来ることは限られている。その中でそれぞれが何を達成目標として考えるか、そもそもそんな目標は存在しているのかなど、そのあたりを細かく打ち合わせながら2回目以降のワークショップ内容を調整していった。こういった機会をいただければ話すことがなかつただろう方々との、自身の持つ知識や経験をフルに活用した意見

交換は楽しいものだった。

2回目のワークショップから変わった点は、お助けアイテムの導入である。人前での表現に抵抗のある方々向けの対策として、幾何学形や植物を模った折り紙・シール・色紙などを用意してもらい、ゼロから1の創造ではなく1+1の創造とすることで少しでもハードルを下げる試みをしてみた。その結果、ラインストーンで一番星を表現したり、紙吹雪を貼り付けてライブハウスの臨場感を表現してくださったりと新しい表現が生まれたのは嬉しかった。一方で、そもそも何を書いているのかわからないので書けないという感想もいただいた。これに関しては、今後、何かアイテム等を用意するのではなく、この空間は誰かに意見を否定されない安全な場である、という空気作りによって解決していけないかと考えている。

こういった技術向上を目的としていないワークショップに即効性があるとは思っていないし、思っただけはいけない。この経験が、今後「何か」の機会の糧になることを願うしかない。この点は舞台作品を上演することと変わらないと思っている。私は何かの糧になるだろうと信じているし、そのために丁寧に仕事をこなしていっただけだ。

ただ支援者の方々や県の職員の皆さまと、その「何か」が何なるかを考え、舞台芸術が持つ力、あるいは人と人が会うことで得られるかもしれないことについて、専門分野関係なくお互いに考えることができたのは今後の本企画への大きな足掛かりになったように思う。

この話し合いが、他者のことを思いながらも、それがすれ違っていくことが前提となって尚もコミュニケーションを続けようとする、という本ワークショップで実施している事柄を体現していたからだ。

4. 担当者の振り返り・次年度に向けて

今年度は、共催市等が支援する当事者の参加が多く見られた。普段関わりのある支援者も一緒にワークに参加する形をとったが、知っている人が近くで同じ作業をしていることで、当事者も安心して取り組んでいるようだった。

また、参加者がうまく言葉を見つけられず口ごもってしまう場面でも、派遣アーティストが質問内容を置き換えたり、体調を気遣う声かけを行ったりするなど、安心して話せる和やかな雰囲気が作られていた。

派遣アーティストと共催市との事前打合せの中では、「お助けアイテム」(絵を描くのが苦手な方のための、丸や星などの形に切った色紙やシールなど)のアイデアが出され、当日絵を描くワークの際に用意しておいた。ワークが始まってみると、参加者は絵を描く作業にとってもポジティブに取り組んでおり、「お助けアイテム」はあくまで一つの素材として、絵の中に活かすような使い方がされており、思いがけない成果を得ることができた。

今年度は県央地域の各市と連携して開催したが、日ごろ当事者と関わっている立場ならではの様々なアイデアや意見を伺うことができ、このワークショップの可能性が広がるとともに、担当者同士の横の繋がりを作ることができた。来年度以降は、県央地域のようなひきこもり支援の広域連携を、さらにほかの地域でも展開できるよう、県内各所での開催を目指していきたい。

5. 参加者の感想

●人によって同じ絵を見ても感じ方が違って、面白かった。


●演じることは恥ずかしいと思っていたが、皆で表現することでその恥ずかしさは無くなった。不思議だっ

た。

●とっても緊張した。でも、人前で話したりできて良かった。来てよかった。

●自分自身の思考のクセが見えてきたような気がする。

ワークショップ参加募集チラシ・表面




神奈川県
令和5年度 舞台芸術活用ワークショップ等青少年支援事業

言いたいことって何だろう？

舞台芸術ワークショップ参加者募集!!

あなた自身の言葉、届けるために


生きづらさを感じているあなたに…
舞台芸術の表現方法を活用したワークショップを開催します。
自分の思い描いたことが、他の人に正しく伝わらない、という体験を通じて、
どのように伝えたらいいのだろう、とみんなで話し合ったり、体で表現してみたりと、
楽しみながらそのヒントを一緒に見つけてみませんか。



令和6年


1 / 19 (金)

13:30~16:30
アミューあつぎ
7階 ミュージックルーム1
申込み締切り: 1月12日(金)



2 / 6 (火)

13:30~16:30
海老名市総合福祉会館
1階 第1・2娛樂室
申込み締切り: 1月30日(火)



ワークショップ参加募集チラシ・裏面

募集内容

対象者: 15歳以上の不登校やひきこもりの当事者・経験者など
※コミュニケーションに不安を抱える方

定員: 各回20名 (応募者多数の場合は抽選)

参加費: 無料

申込方法

下記①～⑤を記載の上、
神奈川県立青少年センター 青少年サポート課
nposupport.440@pref.kanagawa.lg.jp
へメールでお申込みください。



- ① ご希望の日(どちらか、または両日) ※両日とも申し込むことができます
- ② 氏名
- ③ 年齢
- ④ 電話番号
- ⑤ 所属(所属団体、〇〇市居場所活用等。ない場合は記入不要)

メールが難しい場合は、電話での受付も可能です。
045-263-4467 (定休日: 月曜日・年末年始)

講師プロフィール

河井 朗 (かわい ほがら)

演出家。大阪出身。ルサンチカという舞台作品を作るカンパニーを主宰。
戯曲を上演したり人に話を聞いたりして作品を上演している。
ここ数年は、「理想の死に方」や「あの日」について、継続的に色々な人にインタビューしている。

永井 茉梨奈 (ながい まりな)

俳優。富山県出身。新国立劇場演劇研修12期修了。
大学在学時には、渡邊守章氏のもとフランス演劇の研究・上演に携わる。
また、日本舞踊やふるさとの「おわら踊り」など、地域に根ざした踊りと身体について楽しく学んでいる。

蒼乃 まを (あおの まを)

俳優。千葉県出身。大学では日本文学を専攻していた。
青年団に所属して活動。休みの日は、博物館や美術館に行って暇を潰している。
まだ、将来やりたいことが決まっていない、でも、何でもできる人になりたいので何でもやってみようと思っている。

中條 玲 (ちゅうじょう れい)

長崎生まれ。主に舞台芸術に関わっています。
日記やテキストの執筆と、ごはんや植物に関するいくつかの取り組みを行っています。
2022年よりこまばアゴラ劇場制作。

主催: 神奈川県立青少年センター

共催: 厚木市、大和市、海老名市、座間市、綾瀬市

(問合せ先: 神奈川県立青少年センター 青少年サポート課 TEL 045-263-4467)

Report 2

インプロワークショップ

1.概要

会場・日程

会場：神奈川県立青少年センター

日程：令和5年9月10日（日）

事業の背景及び趣旨

インプロビゼーション（即興劇）のアクティビティ体験を通じ、学校及び団体で活動する指導者・支援者のコミュニケーションスキルの向上を図るとともに、多様性に理解を深めることで、共生社会の実現に向けた取組みの推進を担う指導者・支援者の資質の向上に役立てる。

参加人数

支援・指導者、教員、学生等 16名

担当者の開催意図

昨今の社会情勢の中で、人間関係構築能力が非常に重要視されており、人とのコミュニケーションの取り方を体系的に学ぶ機会を創出するため。

派遣アーティスト

アーティスト

…峰松佳代

(株式会社インプロジャパン)

アシスタント

…清水 千絵、中村 太郎

(株式会社インプロジャパン)

2.プログラム内容

プログラム内容のポイント

インプロアクティビティの体験の中で、相手の意

見を一度受け入れ、そこに自分の意見をプラスする「YES AND」の考え方を意識してもらう。

また、ショートレクチャーを挟み、今後のコミュニケーションについてより深く考えるためのヒントを提供する。

時系列プログラム内容

9:30	受付開始、講師来所
10:00	オリエンテーション
10:10	アクティビティ体験、レクチャー
12:00	休憩
13:00	アクティビティ体験、レクチャー
15:50	チーム対抗インプロ
16:15	まとめとふりかえり
16:30	解散

プログラムの詳細

体験したアクティビティ…ストレッチ、ミーティンググリーティング、発信と受信の確認、ナイフとフォーク、2つの関わり方

ヤドカリゲーム、ひらめきリレー、リズムDE連想ゲーム、YESとNO、YES AND、名作1分マイム、ワンワード自己紹介、ワンワードレポート、サンキューゲーム絵日記、チームで発表

アクティビティの合間に、インプロ・シンキング（インプロの考え方）のレクチャーと、アクティビティを体験して気づいたことを互いに話し合う時間が設けられ、聞く、話すを通して学ぶことができた。

最後に行ったチーム発表では、4つのチームに分かれて、「ONE WORD インタビュー」や「名作1分」「サンキュー紙芝居」をチームで協力して発表を行った。

3.アーティストレポート

プログラムの事前準備・当初のねらい

地域で子どもや若者に関わる活動をしている若手の支援者及び指導者を対象に、関わりのヒントとなる内容のワークをご依頼いただいたことを受け、ご参加の皆様、インプロ（即興劇）の手法を通じて、「今」を受け入れ、共演者と変化を一緒に創り上げる、いわば瞬間瞬間の協働創造活動の楽しさと喜びを体験いただくプログラムを準備した。思い込み、固定概念から解き放たれた多様への理解はもちろんのこと、次世代を担う若手の方々が、主体的に考え、関わり、伝えることを楽しみ、現場でその力を発揮するきっかけとなる場になることを目的とした。

実際にプログラムを行っての結果

気づき・所感

10代～50代という幅広い世代、しかも様々な背景の方々がお集まりいただいたことは、より多様なアイデアに触れることが叶い、創造性豊かな場となったように思う。ワーク開始当初は、緊張気味だった10～20代の参加者も、ノンバーバルのワークを経て、チームで表現し合うクイズ対決や、ひらめきを身体で表現する「ひらめきリレー」では、それぞれが瞬時に自らの役割を積極的に発揮する様子が見られ、世代を超えて互いの発想に刺激を受け、協力して創造していた。また、4人グループで行った「イエスアンド冒険」では、研修室という空間にもかかわらず、それぞれの遊び心から豊かな想像力が発揮され、各チームオリジナリティ溢れる冒険の旅を楽しんでいた。多様なアイデアを瞬時に活かし合い創造することで生まれた笑い溢れる空間では、各人の個性が光っていた。最後に行った即席のチームでのプチ発表会で、誕生した「登山家の物語」と「沈没船の物語」は、いずれも世界観が異なり、瞬間瞬間を面白がって関わ

即興コミュニケーショントレーニング



Yes,and の重要性を説明してくれている講師の峰松さん



2人1組でヤドカリゲ



名作1分

ることで唯一無二の世界が創造されることを実感いただけたようで、振り返りでも「答えは人の数だけある」「それぞれ違いが創り上げた達成感」などの声が聞かれ、多様が生み出す楽しさを共有させていただいたように思う。

次回、本プログラムへの展望

多様かつインタラクティブな関わりがより求められるようになってきた中で、子ども達と関わる方々への研修として、「今」から未知を共に表現し合いながら創造するインプロが果たせる役割は大いにあると感じている。

予想外の展開を楽しみ、関わり合う喜びを実感しながら、それぞれの存在を活かしたオリジナルストーリーが誕生するよう、我々自身も、常に発見からの変化創造を怠らず、参加者やその場にイエスアンドした場をつくっていききたい。

4. 担当者の振り返り・次回へ向けての改善点

企画・実施において苦勞した点

本年度は、若者向けに対象を絞って行なったが、なかなか参加者確保が難しかった。研修の内容的に、若者世代に需要のあることは間違いないのだが、広報の仕方や宣伝が難しく苦勞した。また、研修の内容が参加者のニーズと合うように打ち合わせを行い計画していくことに苦勞した。

企画を実施した結果

コミュニケーションはトレーニングできるということを体験を通して知ることができた。普段私たちが何となく日常を過ごす中で、受信と発信をしてコミュニケーションを取っていること、相手の言ったことに対して否定せずに受け入れてから自分の発言

をすること。このYES,ANDをコミュニケーションの中で取り入れることにより、より良く周りの人間関係を構築できることにつながるのではないかと感じた。昨今は、SNSの普及やインターネットでの誹謗中傷など人とのかかわりあいの中で大きく事件やトラブルになることが少なくない。また、若い人たちの間では仲間に迎合して意見を言えないなどコミュニケーションによる問題が多々あると聞く。インプロは、私たちの職場や、学校、青少年施設などさまざまな場所で必要となるコミュニケーショントレーニングではないかと考える。

次回、本事業を行う上での改善点

苦勞した点でも述べたが、広報の仕方が一番改善しなければならない点であると考え。この研修を求めているニーズのある人に届けられるようペルソナをしっかりと設定しターゲットを絞って広報をしていきたい。

5. 本事業における結果報告

参加者の気づき・感想

- アドリブでコミュニケーションを取ることの斬新さから積極的な行動が大切だと感じた。
- YES and の劇や形を作るなど、室内で少人数でも出来そうなので関わる子どもとやってみたい。
- 体を使った表現よりも言葉で理解させる表現をおおくつかっているが、実は体を使った表現の方が豊かな理解をうむのではと感じました。
- 相手の話を受け入れるだけではなく、それに基づいた自分の意見を提示することで会話が楽しくなるのだと強く感じる事ができた。
- 柔軟な思考の手助けをいただきました

ワークショップ参加募集チラシ・表面



ワークショップ参加募集チラシ・裏面

即興 コミュニケーション トレーニング

For the NEXT Generations: Leader, Teacher, and Facilitator.

インプロビゼーション(即興劇)のアクティビティを体験し、学校や団体で活動する指導者・支援者のコミュニケーションスキルの向上を図る講座です。

『子ども・若者と関わっていると、予想外のことだらけで、もう大挫て、でもそれがツマナクで、楽しくて、だからまたやりたいなって思っんです。考えてみれば、私たちはいつもその場に合わせて行動します。そう、それはまさに『即興』。』

『『即興演劇』という、独特のジャンルがあります。それは、その場、瞬間の役者の『ひらめき』で、物語が進んでいく手法。ひらめきが繋がっていくスペクタクルなスタイル。』

今年新たに立ち上がったこの事業は、アイスブレイキングのアクティビティなど、『入門的な内容を体験しつつ、はっと気づいたら『即興コミュニケーションスキル』が養われている(！)ことを期待したよくばりプログラムです。そう、実は『即興コミュニケーション』を通じて練習できるんです！『本人経験がこけり、』『チームビルディングの経験は、きっと』『多量担任や支援教育に通じる大切なことを教えてくれるはず。』

ぜひご応募ください。
この日のひらめきが、みなさんにとって
明日の自信を持ってつづける、ときめきとなりますように。

【講師】 **峰松 佳代 氏**

(株)インプロジャパン シニア・トレーナー
日本大学芸術学部演劇学科卒業。幼少より映像・舞台分野で活動。2004年よりインプロジャパンに所属し、現在では、インプロパフォーマーとして活躍する傍ら、企業から学校まで幅広い分野において、インプロを活用したトレーニングの講師も務めている。



【主催】 神奈川県立青少年センター指導者育成課

【日時】 令和5年 9月10日(日)10:00~16:30
(受付 9:30 開始)

【会場】 県立青少年センター3階 研修室1

【対象】 次のいずれかを対象とします。

- ① 現在子どもと関わっている、または関わることに興味がある中学生以上の若者
- ② 学校や団体等で青少年育成に携わる若手(30歳未満)の職員

【×切】 令和5年 8月31日(木)

【持ち物】 服装、動きやすい服装、筆記用具

【申込み】 メール、または電話でお申込みください。

- ・ 8月31日(木)に応募締め切り、応募者多数の場合は抽選とし、申込者全員に連絡いたします。
- ・ なお抽選にあたっては、抽選事務局に初めて参加される方を優先いたします。締め切り後に空席がある場合には、順次先着順で受け付けます。

【メールでの申込方法】 件名を「即興コミュニケーショントレーニング申込み」とし、次の内容を県立青少年センター指導者育成課 seishonen.c.kusei@conf.kanagawa.lg.jp へ送付してください。

① 氏名、② ふりがな、③ 所属、④ 電話番号、⑤ メールアドレス、⑥ 居住市町村

【電話での申込方法】 「メールでの申込方法」の内容を、ご確認ください。県立青少年センター指導者育成課 045-263-4466 (8:30~17:15、月曜休館)

【定員】 20名程度

【費用】 無料

問合せ先
 神奈川県立青少年センター 指導者育成課(横浜西区紅葉ヶ丘9-1)
 TEL: 045-263-4466(直通) 8:30~17:15(月曜休館)
 FAX: 045-242-8190
 E-MAIL: seishonen.c.kusei@conf.kanagawa.lg.jp メールはこちらのコードから→



共感する場を創る

令和5年度 舞台芸術活用青少年支援事業報告書

編集・発行 神奈川県立青少年センター

〒220-0044

横浜市西区紅葉ヶ丘9番地の1

電話:045-263-4400(代表)

発行日 令和6年3月



神奈川県立青少年センター



神奈川県

県立青少年センター

〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘9番地の1

電話(045)263-4400